

平成22年度終了課題に係る終了評価書

研究機関 : (株)国際電気通信基礎技術研究所、大阪大学、沖電気工業(株)、
慶應義塾大学、東京大学、日本電気(株)、日本電信電話(株)、
パナソニック(株)、(株)KDDI研究所、

研究開発課題 : ユビキタス・プラットフォーム技術の研究開発
(ユビキタスサービスプラットフォーム技術)

研究開発期間 : 平成 20 ～ 22 年度

代表研究責任者 : 大橋 正良

■ 総合評価(SABCD の5段階評価) : 評価 A

■ 総合評価点 : 45 点

(総論)

プラットフォーム像を具体化したことは評価できる。

(コメント)

○ 成果を上げているが、これによるビジネス展開にはいっそうの努力が必要である。

(1) 研究開発の目的・政策的位置付けおよび目標

(SABCD の5段階評価) : 評価 A

評価点 : 8点

(総論)

実世界コンピューティングサービス時代に向けて、プラットフォーム共通基盤を目指しており、目的・位置付け・目標は妥当である。

(コメント)

- M2M のネットワークを形成するオープンシステムについて、その基本が形成された。

(2) 研究開発マネジメント(費用対効果分析を含む)

(SABCD の5段階評価) : 評価 A

評価点 : 9点

(総論)

多数の機関の協力関係が極めて緊密に保たれている。

(コメント)

- 9機関という数多い機関が、3つのSWGを構成することにより、全機関が連携してオープンイノベーション型の研究開発活動を行い、連携して CEATEC や岩見沢市、ユビキタスパーク等での実証実験を行うことができた。
- 欧州プロジェクトとの意見交換や複数機関をまたがったインタフェースの共通化が行われたことは評価できる。
- ただし、SWG1 と SWG2 / SWG3 の関係が見えにくかった印象がある。

(3) 研究開発成果の目標達成状況

(SABCD の5段階評価) : 評価 A

評価点 : 7点

(総論)

十分な成果発表が行われ、連携の結果として実証実験システムを動かすことにも成功した。

(コメント)

- 成果はアーキテクチャや、インタフェースの業界的広がりであるはずであるが、その点の広がりが不足している。
- 国際標準化に向けて、説得力のある努力を求める。
- プラットフォーム確立に向けてのマイルストーンを設定し、そのマイルストーンにしたがって計画的に研究開発を進めたとの説明が欲しかった。

(4) 研究開発成果の社会展開のための活動実績

(SABCD の5段階評価) : 評価 A

評価点 : 7点

(総論)

十分な活動実績があると考えられる。

(コメント)

- オープンソース化、プレスリリース、イベントなど多彩に広報、普及活動を展開した。
- プラットフォームを普及させ、ビジネス化する戦略が欲しい。
- 研究成果の社会的広がりが限定的である。
- アーキテクチャ、インタフェースの標準化にいつそうの努力が望まれる。

(5) 研究開発成果の社会展開のための計画

(SABCD の5段階評価) : 評価 A

評価点 : 7点

(総論)

プラットフォームが端末やサービスを牽引する戦略を期待する。

(コメント)

- 多くのメンバが協力したことを強味とする活動を期待する。今後の継続的な協調が求められる。
- 成果の展開が研究を実施した機関の中に留まっており、各機関が所属する企業の中においても十分に一般化しているとは言えない。
- このアーキテクチャによる製品の一般化、オープンサービスに向けての流れを形成する努力が求められる。
- 実用化への道筋を、より具体的に検討すべきだったと思う。